
VG学園小等部！

観羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

V G 学園小等部！

【Nコード】

N 8 6 0 2 Y

【作者名】

観羅

【あらすじ】

V G 学園。そこではイメージの力によって動かすロボット「KR B」を使いこなす対時空犯罪者組織「ヴァンガード」の隊員を育成する学園である。この学園は「KR B」を使いこなすためイメージを活用するカードゲーム「カードファイト！ヴァンガード」を授業の一環として取り入れている。この物語は「ヴァンガード」の隊員志願生の權トシキが不思議な能力を持つ少年、先導アイチと出会い、彼の能力を狙う時空犯罪組織「ジャステイス」と戦う日々を描いた物語： 守ること、救うこと、それがどういことなのか

を權は大事な家族であるアイチを『ジャスティス』から守り抜く
中で学んでいく。

プロローグ

俺の名前は權トシキ。このVG学園の小等部に通う四年生だ。

ああ、VG学園ってのはな、時空犯罪者っていうのを取り締まる警察みたいな特殊組織『ヴァンガード』の隊員を育てる学校なんだ。

『ヴァンガード』の隊員は自分のイメージを使って動かすロボット『KRB』を使う人達が集まっているんだ。そしてこのVG学園はそのイメージの力を育てるために『ヴァンガード』っていうカードゲームを授業の一環に取り入れてるんだ。

『ヴァンガード』志願生は少ないから一学年に学級も一つだけ。

その学級に、ある能力をもった不思議な奴がやって来る。

そこから俺らの物語は始まったんだ！

プロローグ（後書き）

もうどうしようもないパロです。

妄想の塊です。

ライド1 出会い

????

「第5ブロックいません！」

「クソっ、早く見つけ出せ！アレがなければ私たちの計画は失敗なんだ！」

「ハッ！」

1つの施設で慌ただしく男たちが何かを探していた。

V G 学園小等部

「權〜！」

ここはV G 学園。

対犯罪者組織『ヴァンガード』の隊員を育てる学校である。
その学校の小等部四年の權トシキは今日も授業が終わると友人の三和とともに広場で『カードファイト！ヴァンガード』というカードゲームをするために教室を出た。

「何だよ三和？」

權は話しかけてきた三和に返事をするために振り返る。

「へっへへ〜！俺もついに『KRB』の免許取ったぜ〜！」

警察手帳のような表紙に『ヴァンガード』の紋章の描かれた免許を三和が掲げるように見せてくる。

『KRB』は様々な試験をクリアすることでやっと乗ることが出来る機動兵器。

そして全ての試験をクリアした者にこの免許が発行される。

そしてこの免許を持っている者には専用機が与えられるのだ。

「へえ！やったじゃん！」

「これで俺も専用機持ちの仲間入りだな〜！」

「ああ！これで三和と本気の真剣勝負ができるな！」

「い、いや、遠慮しときます…」

權も専用機持ちであり専用機の名前は『ドラゴニック』

「そーいや、三和の専用機って？」

「遠距離型の『ランシャー』だぜ！」

「へえ、つてマジかよ!?あの最新機!？」

「ああ。何か一番適正值があつてるとかださ！」

専用機の『KRB』の内部には『ハーツ』と言う意志の集合体がありこれの適正值が合うか合っていないかでどれが専用機になるかが決まるのだ。

「ふうん…あれ?あそこ…」

權は校門の近くを指さす。

「何か転がってるな」

三和はそう言う。

「あれって…人!？」

よくよく見るとそれは青い髪の少年だった。

「た、大変だ！」

權と三和は急いで少年に駆け寄る。
權は脈を測る。

「大丈夫、気を失ってるだけだ…。三和、レン先生を呼んで来い！」

「あ、ああ！」

櫛は自分の着ているV G学園の制服の上着を少年にかけてとできる限りの応急処置を施し始めた。

ライド2 自己紹介

「う、ううん…?」

權と三和、彼らの担任の雀ヶ森レンが保健室のベッドに横たわっている青い髪の少年が目を開けたことに喜んだ。

「起きた！レン先生、起きた！」

「はいはい、静かにしようか。僕は雀ヶ森レンです。君は？」

權が騒ぐのをやんわりと止めたレンは自己紹介をする。

「ヒッ…！あ、あぁっ…！」

少年は起き上がるとレンの握手のために伸ばした手から逃れようと身を引く。

「あ、あれえ〜?」

「先生嫌われてんじゃないん！（爆笑）」

三和が爆笑する。

「（ムカツ…！）そうですね、嫌われてしまったようですね…。」

「何か人に怯えてる感じだ…。」

權はそう言つと少年を安心させるように抱き締めた。

「ヒッ……!」

「俺さ、お前と友達になりたいんだ。だから、それだけだから。だからさ、怯えないで欲しいんだ。」

「っ……!ひ、酷いことしない……?」

「もち!するわけねえだろ?」

權はウインクしてみせる。

「先導アイチ……。」

「それがお前の名前?」

「う、うん……」

少年……アイチはそう頷く。

「俺、權トシキ!」

「か、權君?」

「ああ!よろしくな!」

權は笑って手を差し出す。

アイチはその手を恐る恐る握り返した。

「僕……帰るところがありません……」

ライド3 親

アイチの体に残る痛々しい傷跡を見て權は悲しい気持ちになった。

「どうして悲しそうな顔をするの？」

「…アイチ、親いないの？」

「うん。ずっと研究所育ちだったから。」

權は研究所という言葉を聞くと顔色を変えた。

「研究所…？」

「うん。注射を毎日打たれてね、変な機械に入れられると電流がビリビリッと流れるんだ。痛くてもやめてくれなくてそれで「もういい!!」「…」

權はアイチを抱きしめた。

「もういいよ…もう、いいから…」

權は自分がV G学園に入学する前の出来事を思い出していた。

「うわあああん！！お母さん、お父さん、どこに行っちゃったんだよおおおお！！うわああああん！！！」

炎上する建物、真っ赤に燃える炎に包まれ幼い權はそこにいた。

「ひつく、お母さん、お父さん……」

權はボロボロの状態で歩き続けた。

「怖いよお、痛いよお……」

そこに1機の黒い『KRB』が止まった。

「大丈夫かい！？」

『KRB』の胸の部分が開き中から茶色い隊服を着た『ヴァンガード』の隊員が現れる。

彼こそが現在、權の担任であるレンであった。

「ふつく、ひつく……お母さんは？お父さんは？」

「とにかくここから逃げよう。乗って！」

レンは權を抱え上げると操縦席に再び乗った。

「いくよ、ダーク！」

』

』

レンの頭の中に声が響くと『KRB』はそのまま飛び立った。

避難所

「權君と言いましたね……彼のご両親は残念ながら……」

「……わかりました。」

「……『ジャスティス』は何故このようなことを引き起こしたの
でしょうね？」

「わかりません、ですが…」「レン?」「か、權!?!」

「お母さんは?お父さんは?」

「……………」

「そんな…う、嘘だ…うわああああああん!!!!」

「…親は?」

「うづん。」

「そっか…お前も同じなんだな。俺と…」

權は何が何でもアイチを守り抜こうと誓った。そして彼を家族にしようとも。

ライド4 襲撃

ドゴオオオオオン!!

ものすごい爆発音がしたかと思うと警報が鳴り始める。

『ウーンウーン 侵入者発見、侵入者発見、先生方は侵入者撃退へ、生徒は危険ですのですぐに避難して下さい』

機会音声が聞こえるとバタバタと足音が通り過ぎていく。侵入者を撃退するために先生達が出撃したのだ。三和が部屋に飛び込んでくる。

「近かったからお邪魔します!あ、アイチだっけ?」

「は、はい……」

「俺、三和タイシ!權の悪友だ!よろしくな!」

「……//」

アイチはさっと權の後ろに隠れる。

「あつれ〜?」

「ハハハッ…それにしても侵入者っていったい……」

「どうせいつもの物好きな記者じゃない?VG学園の秘密を暴く!

とか言つてスキャンダル狙つて入ったりとか」

「そうだといいいんだけどな…」

權は一瞬だけ嫌な予感を感じ目を伏せた。

「まっ、大丈夫っしょ！レン先生なんかは『ヴァンガード』の執務官で少佐だぜ？そこらの犯罪者なんてパパッとやっつけちまうよ！」

「そう…だな…」

權はそれでも不安が抑え切れなかった。

ただの記者があんな爆発を起こすはずがない…

ドゴオオオオオン！！

爆発音が再び起きた。

先ほどより近づいている。

「様子見してくる。三和はアイチと一緒に待つててくれ。」

權はそう言い立ち上がった。

しかしアイチが制服の裾を掴み離そうとしない。

「アイチ…待つてる。すぐ戻る。」

「ヤッ！行かないで權君！」

「……わかったよ。一緒に行くか。俺ら専用機持ちだし、いざとなったらアイチ連れて逃げれるだろ。」

權は肩を落とすとそう言った。

そして…

「クリア。」

「こつちもクリア。」

2人は携帯型拳銃を片手にアイチを守りながら少しずつ進んでいった。

そして校庭に出た。

「な、何だよこれ…」

「嘘だろ…?」

校庭は所々クレーターができていたり木々がへし折れていたりしていた。

そして極めつけは…

「先生が全滅…!?!」

先生たちのKRBがすべて倒れていたからである。

「っ…っ…っ…」

レンのKRB、ダークが立ち上がるように地面に倒れこむ。動くイメージがちゃんとできないか機体がダメージを一定以上受けハーツが搭乗者のイメージに反応していないかである。

「コレデ終わリダ…」

灰色の機体がダークの胸部のハッチの扉をこじ開ける。

「死ネ。雀ヶ森レン…」

ハッチの中で気絶したレンに謎のKRBの銃器が突きつけられる。

「や、止めるおおおおお!!!!」

權は走りながら待機状態のKRB、ドラゴニックを起動させる。

「ドラゴニック、セットアップ!うおおおお!!!!」

權は起動したKRBの紅い機体のハッチに自動的に乗せられるとコールドが着いたゴーグルを着用しイメージをハーツに送り込む。強力なリアットが灰色の機体を吹っ飛ばした。

「三和、レン先生とアイチを頼む!」

「了解!」

迷彩色の機体。ランシャーがレンの機体を待機状態にしレンを抱え上げた。

ドラゴニックの両足の装甲が開き中から拳銃が二丁出てくる。

「てめえ、絶対に許さねえ！」

權がドラゴニックのハーツにイメージを送る。
拳銃から弾丸が連射される。

それを灰色の機体はジャンプし避け恐るべき速さで爪型の装備を使い權の機体を突き刺す！

「うわあああ！」

ゴーグルの画面に機体の損傷ダメージが映し出される。

『肩部分ノ機々破損 損傷ダメージ5%』

無機質な機械音声がエラーを告げる。

「ま、まだまだ、こんぐらいの傷なんて！ドラグリス、ライトガツシャーだ！」

拳銃同士を変形させ繋ぎ合わせライフルに変える權。
そこからレーザーを何発も打ち出した。

「フンツ。」

灰色の機体は爪でレーザーをはじく。

「私ノ特性八鏡。鏡ハスベテヲ反射スル。遠距離攻撃ナド私ニハ効カヌ。」

「っ！」

特性：それはどんなKR Bにもある特殊能力。

ハーツから齎される特殊なエネルギーによってこの能力が発動されている。

能力はハーツと意識がシンクロしていないと使えないだけ使いこなすのは難しい。

「遠距離攻撃が効かない接近型ってどうすりゃいいんだよ……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8602y/>

VG学園小等部！

2012年1月14日13時47分発行